曹洞宗のご詠歌は、「梅花流詠讃歌」といい、お釈迦様や道元禅師・瑩山禅師のご一生や曹洞宗の教えが歌詞となっています。お唱えをしながら楽しく仏教に触れることができます。善光寺では毎月一回、御詠歌教室を開催しています。講師は、元梅花流特派師範　栃木県高徳寺副住職渡邊清徳師です。

「梅花流詠讃歌（ばいかりゅうえいさんか）の歴史と曲の紹介」

梅花流師範　渡邊清徳
（高徳寺副住職）

今年春からの新型コロナウイルスの世界的な感染の広がりにより、東京オリンピックが延期されただけでなく、私たちを取り巻く環境や生活も一変してしまいました。

これまでの常識が通用しなくなり、新たな生活環境に随時適応しながらの生活は窮屈で、みんなが大きなストレスと苦しみを抱えています。こんな時だからこそ、お寺に集いお互い顔を合わせ、ご供養のまことを一つにしたいところで

すが、残念ながら感染予防のため、本年の善光寺様の法要やイベントは、ほぼ中止となってしまいました。私が毎月担当させていただいている「善光寺御詠歌教室」もしばらくお休みとなっています。

春秋のお彼岸や、施食会法要では、皆様と共に詠讃歌を唱え、法要に花を添えています。お経の内容や意味は、読んだだけでは少しわかりにくいと思いますが、それに比べ詠讃歌は、歌詞に仏教の教えがちりばめられており、平易に理解しやすく、聞いているだけでもそのメロディに心を揺さぶられます。更に声に出してお唱えすると、色々な気持ちがこみ上げてきて、歌い終わった後に心がスッキリするような気がします。

私のお寺では、通夜・葬儀だけでなく、年回法要の時にも詠讃歌をお唱えします。参列者の中には、一緒にお唱えしましょうと促すと、「私

は音痴だから……」等と遠慮される方もいらっしゃいます。しかし詠讃歌は、歌が上手いとか、声が良いとか悪いなどはあまり問題になりません。自ら詠讃歌（み仏の教え）を声に出せば、その歌詞やメロディにいざなわれ、いつの間にか自らの心に「花」が咲くのです。その心の花が「仏心」であり、私たちが一番大切にしなければならないものです。善光寺様の法要でなされている、お経やご法話・詠讃歌は全て、皆さんに気づきを促し、本来備わっている「浄（きよ）らかな心の花」を咲かせるためのものなのです。

そのようなわけで、今年は詠讃歌を一緒に唱える機会がありませんでしたので、今回は曹洞宗の詠讃歌である梅花流詠讃歌の歴史と、いくつかの曲をご紹介したいと思います。

詠讃歌とは、日本に伝わる宗教音楽の一つで、仏教に関わる歌詞を持ち、民謡などに似た節を付して歌われるものです。成り立ちは諸説ありますが、十六世紀頃には存在していたことが確実で、江戸時代には坂東・西国・四国等の霊場では、巡礼歌として広く歌われていました。そのメロディは口伝えで受け継がれていましたが、大正時代に山崎千久松という人物が、それまでばらばらに唱えられていた巡礼歌を収集・編纂し大和講（流）を創設しました。その後、仏教音楽として格式を高めるべく、高野山真言宗の管長に総裁就任を依頼し、在家信者さんたちの仏讃歌として用いられることとなりました。後に高野山真言宗とは決別してしまいますが、高野山真言宗は、独自に金剛流を立ち上げ、真言宗智山派は密厳（みつごん）流、豊山派（豊山流）、浄土宗（吉水（よしみず）流）、臨済宗妙心寺派（花園流）など、その流れは各宗派に広がっていきました。

曹洞宗では、昭和二十七年、道元禅師の七百回大遠忌に向け仏教音楽を取り入れようと、各流派の詠讃歌を公聴し、運営や組織の調査を行

いました。各流派の詠匠により自流の極意が披露されましたが、模範にすべき流派は、行持綿密な作法、唱え方もはげしくもなく低調でもなく、曹洞宗の性格にふさわしいものとして真言宗智山派の密厳流が選定されました。そして、密厳流の先生を招聘し、若手僧侶たちが詠讃歌を学び、梅花流の創立にこぎつけたのです。設立当初、梅花流には曲がありませんでしたので、密厳流から曲を数曲ご提供いただき、新たに歌詞を付け加えて唱えられることとなりました。その後、梅花流独自の曲もできましたが、密厳流から頂いた曲は今も「伝承曲」として唱えられています。

「梅花流」の流名については、正法流・芙蓉流・梅花流といくつかの候補が挙がりましたが、道元禅師の著書『正法眼蔵』「梅花」の巻、瑩山禅師がお示しになられた『伝光録』中の「梅華」という言葉に因み、委員会で決定されました。その後、昭和二十七年一月に第一回梅花流講習会が開催され、以降毎年各地で講習会が行われています。また全国の講員さんの発表会でもある梅花流全国奉詠大会も盛大に開催されています。

そもそも「詠讃歌（えいさんか）」とは、御詠歌（ごえいか）と讃歌（さんか）の総称です。五・七・五・七・七の短歌形式で詠まれたものが御詠歌で、七・五調で綴られた和歌が讃歌であります。讃歌は、お釈迦様やお祖師様方のみ教えや、ご生涯の物語などが語られており、ご詠歌はその心を短歌で表したものです。

梅花流の曲は、いくつかのジャンルに分けられています。仏教徒の根本である帰依三宝を唱える「三宝御和讃」や曹洞宗の経典である『修証義』の内容を示した「修証義御和讃」をはじめ、坐禅の心を詠った「坐禅御詠歌（浄心）」など、やさしく曹洞宗の教えに触れることができます。また、お釈迦様や道元禅師・瑩山禅師

のお誕生や修行の様子、観音様やお地蔵様の菩薩の誓願を示した曲もあります。そして、亡くなった方へのご供養の曲もあります。今回は、その中のいくつかをご紹介致します。

はじめに、皆様も良くご存じだとは思いますが、お釈迦様のお誕生の様子を伝えた御和讃です。

『釈尊花祭御和讃』

(一)三千年昔ルンビニの
花の御園に生れましし
玉のおの子は人の世の
救いの御親となりたもう

お釈迦様の誕生日である四月八日の花まつりの歌です。お釈迦様は、紀元前約五百年頃に、インドの北部にある小さな国の王子として生を享けました。お母さまのマーヤ夫人は、白い象がお腹に入る夢を見てご懐妊されたとのことです。お釈迦様がお生まれになった時の様子は次のように伝えられています。マーヤ夫人が、ルンビニの花園で無憂樹の花に触れようとして右手を上げた時、その右脇からお釈迦様がお生まれになりました。お生まれになるとすぐに、お釈迦様は七歩お歩きになり、右手の指で天を指し、左手の指で地を指しながら「天上天下唯我独尊（私はこの世で最も大切な教えを広めます）」と宣言され、それを聞いた天上界が歓喜の甘い雨を降らせたとのことです。

(二)天にも地にもひとりなる
尊き我に目覚めよと
教え給いし法の花
後の世までも香るなり

「天上天下唯我独尊」の言葉は有名ですが、間違った解釈をされていることがあります。これは、自分という存在は、この世に唯一無二であり、その命はすべて尊いものであるということです。SMAPのヒットソングに「世界に一つだけの花」という曲がありますが、「世界に一つだけの花、一人ひとり違う種を持つ、その花を咲かせることだけに一生懸命になればいい」という歌詞は、この教えからできたといわれています。

㈢心の花も咲き匂う
卯月八日の花まつり
幼姿のみ仏に
甘茶灌ぎて祝わなん

曹洞宗寺院では、三仏忌（四月八日お釈迦様の降誕会・十二月八日の成道会《お悟りの日》・

二月十五日の涅槃会《お命日》を勤めています。花祭りには、誕生仏に甘茶を灌ぐシーンは、皆様も何かの機会に目にされことがあることでしょう。毎年、善光寺御詠歌教室でも三仏忌をお勤めしております。そのようにご縁に合わせた年々の行持をつとめることによって、私たちの信心が芽吹いていくのです。

次に、今年九月に善光寺様に新たに観音堂が建立されましたので、観音様の御和讃に触れてみたいと思います。

『観世音菩薩御和讃』

(一)お慈悲の眼あたたかく
まどかに智慧は満ちわたる
この世の母のおん姿
南無や大悲の観世音

今秋、先代住職黒田武志和尚様の十七回忌に合わせ、善光寺様に観音堂が完成しました。観音様の慈悲の光は、分け隔てなく誰にでも満遍なく注がれますので、「普門」とか「円通」と表されます。普門寺とか円通寺という名前のお寺は、観音様がおわすお寺ということです。観音様のそのやさしい眼差しはあたたかく、まるで慈母のようにやさしく包み込んでくれると詠っています。

(二)心の闇はくらくして
迷いはまこと深けれど
深きがゆえのおん誓い
南無や大悲の観世音

私達は日々の暮らしの中で、悩んだり不安を感じたりしています。今年はコロナ禍で多くの人が口に出せない苦しみを抱いています。「観

世音」とは、そんな世の中を「観察」し、衆生の「声なき声（音）」を聴きつけるのです。そして、その気持ちに寄り添い、悟りの世界に導くお手伝いをするという意味です。私たちは迷いの中で生きているからこそ、どう生きるべきかという答えを探し求めています。その答えを現実的な事象の解決だけでなく、信仰の中で心のゆたかさとして導き出すこともできるのではないでしょうか。どうぞ善光寺の観音堂にお参り頂き、掌を合わせ心から「南無大悲観世音」と念じてみてください。

㈢めぐみのなかにつつまれて

うれしさあまるおきふしに
何をばおもいわずらわん
南無や大悲の観世音

観音様の慈悲の中で生かされているという感覚に満たされたとき、思い煩うことすらも苦ではなく、安心して生きていくことができます。また、自らが観音様のように、多くの人に慈悲を手向けていくことが、自らの安心に到るきっかけとなるのです。

最後にご供養の御詠歌を紹介します。先述の通り、御詠歌は和讃と違い、短歌形式でその気持ち（本当の意味）を詠んでいます。

『追善供養御詠歌（妙鐘）』

うちならす鐘のひびきはそのままに
三世の仏のみ声なるらん

私が指導させていただいている梅花講員さんの旦那様が、突然お亡くなりになりました。奥様は、悲しみのあまり、しばらくお稽古を休まれていましたが、ある時お元気な姿で顔を出されました。お稽古が終わり、みんなでお茶をし

ている時、その奥様が突然話し出しました。「先生、私お父さんの供養の為に、毎日お仏壇の前で御詠歌を唱えていたんです。最初は悲しくて悲しくて仕方がなかったのだけど、ある時『いつまでもメソメソしていてお前らしくないぞ！』って、お父さんの声が聞こえて……それで、いつまでも悲しんでいたらいけないと思って、今日出向いて来たんです」と言われました。

「打ち鳴らす鐘の響きはそのままに三世の仏のみ声なるらん」奥様が、旦那様の為に一心に御詠歌を唱えながら鳴らしていた鈴・鉦の音は、そのままみ仏からの「諸行無常」を知らせる声だったのでしょう。

私たちは、常に移ろい変わる世に身を寄せているということを理解しているつもりですが、いざ目の前に予想もしない現象が起こった時、戸惑い、受け入れるのに少し時間がかかることがあります。

しかし、亡くなった大切な方に対して、本当に感謝の気持ちを捧げようとするならば、これから自分の命をどう働かせていくかということも学んでいかねばならないのです。奥様は、自ら鳴らしている鐘の音でそのことに気づいたのでしょう。

追善供養は、「善を追う」と書きます。亡き人から受けて嬉しかった善行を、今度は残された私たちが多くの人に振り向けていくことです。それによって、亡き人の姿は見えなくなっても、その方の思いや願いは引き継がれていくのです。それが本当の追善供養なのです。

ここまで梅花流詠讃歌の歴史と曲の紹介をしてきましたが、梅花流には八十を超える曲がありますので、時間の都合上またの機会にご紹介したいと思います。できますれば、次回は皆様と共に詠讃歌を唱えながら、その歌詞に親しめれば、更なる法悦に結び付くことができるので

はないかと存じます。どうか、それまで皆様ご自愛頂き、お元気でお過ごしいただきますことをご祈念申し上げております。

合掌

梅花流詠讃歌は曹洞宗のホームページで試聴できます。
また洋楽譜もダウンロードできます。